
月光病

深月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光病

【Nコード】

N6264L

【作者名】

深月織

【あらすじ】

短編集。

お題に基づいたり、ひらめいたりな短いエピソードがほとんどです。各話はそれぞれ独立しているものもあれば、視点が違ったりしているものもあつたりします。お暇つぶしにどうぞ。

(W r i t t i n g : 2 0 0 8 / 0 4 / 1 5) / 0 4 / 2 6)

さよならまで

「ここにいたのか」

声をかけられる前に分かった、あなたの気配。

だから振り向かず、わたしは黙って窓の外を見ていた。

足音をさせずに静かに歩くあなたのクセ、片手を白衣のポケットに引っ掛けてこちらへゆっくりやって来る、そんな光景、目を閉じていたって簡単に思い浮かべられる。

ずっと見てたんだもの。

「役員の奴ら、捜していたぞ」

あと四歩。

「前会長の前途を祝うとか、ハリキってた。引退して随分経つのに慕われてるよな、お前は」

……あと、二歩。

「……答辞、どうして辞退したんだ？」

背中から覆い被さるよつた、空気ごと、抱きしめるよつた腕、

大好きだった。

「卒業おめでとう…って、まだ言ってなかったな」

低く甘い声、

耳元で囁かれる度、

身体中があなたを求めてどうしようもなかった。

ねえ先生。

キスの仕方もあることも、

殺したいくらい愛することだって、
全部全部。

いろんなこと、

あなたに教えてもらったけど、

肝心なこと教わってない。

どうしたら、

あなたときよならでできるの。

あなたがそこにいるだけで、

わたしの全てが引き寄せられる、

そんなになるまであなたを愛してしまったの。

卒業までの関係だって分かっていたのに。

さよならの仕方が分からない。

どうして答辞を辞退したなんて、そんなこと。

貴方との思い出が有りすぎる、この学舎を去る覚悟がまだ出来ない私に、出来るはずがない。

ねえ教えて先生。

この口づけが終わったら、

抱きしめる腕が離れたら、

あなたとお別れする方法を。

さよならまで、

あと何秒

？

僕が愛して君が憎んだ

「貴方のせいじゃないでしょう？ 貴方も被害者なのに、どうしてそこまでしなくちゃいけないの！」

そんな言葉は嫌と言うほど聞いた。

だが、私が彼女に対して取り返しのつかない罪を犯したのは言い訳の聞かない事実。

だから私は何を犠牲にしても彼女に償わなければならないのだ。

引き留めようとする女に別れを告げて、私は家へ急ぐ。

いつもの帰宅時間を随分過ぎてしまった。

早くしないと、さぞかし彼女が

「遅かったのね。また何処かで誰かに殺されかけてるのかと思ったわ」

「すみません、仕事を立て込んで」

玄関で使用人にコートと手荷物を渡し、階段の上で、私に冷ややかな瞳を向けている彼女の元へ急ぎ足で向かう。

車椅子に座った、華奢な少女の元へ。

ブイと背けた顔に微笑みかけて、椅子を押し始める。

「髪を洗いたいだよ。早くして頂戴」

「はい」

私が年端もゆかぬ少女にかしづく様を会社の者達が見たらさぞかし驚くだろう。

女王のように振る舞う少女と、

忠実な従者、

それが私達の関係。

2年前遭った事故に因り、半身不随になってしまった彼女の介護に人を雇ってはどうかと言われたこともあったが、全て私自身がすると決めている。

彼女の自由を奪い、彼女の唯一の家族を奪ったのは私なのだから。

いわゆるお家騒動、というやつで、あの頃私は命を狙われていた。

雨の日の高速道路、事故を装い乗っていた車にトラックをぶつけられ 巻き込んでしまった、前を走っていた軽自動車。

早くに両親を亡くし、仲良く支え合って生きてきた兄妹、大破した車に乗っていたのはそんな二人だった。

運転していた兄は即死、助手席の妹は一命をとりとめたが神経を損傷して一生歩くことの叶わない身体に。

死ぬはずだった私は丈夫な車のお陰で、左手を骨折しただけで済んだ。

意識を取り戻した彼女を見舞いに訪れたあの日、

人殺し！ お兄ちゃんを返してよおおっ！

自身も傷を負い、上半身しか動けない状態で泣き叫び、手当たり次第に周りの物を投げつけてきた、小さな少女の激情。

憎悪を込めた瞳が向けられた瞬間、

囚われた。

鮮やかに心を映すその瞳に。

その瞳を私に向けてくれるなら、憎しみでも構わないと思ってしまった。

……だから、

一生憎んで、

一生許さないで、

一生責め続けて。

そうすれば君を、

贖罪という檻の中、一生愛することが出来るから。

きつと、また、この掌に

ずっと、つないでいた手を離れたのはいつのことだったろう。

君の背が伸びて、わたしを追い越した頃？

ケンカするのに君の手が出なくなって、勝ちを譲ってくれるようになった頃？

わたしの髪が長くなって、風に踊るようになった頃かしら。

まぶしそうに、目を細めて私を見つめる瞳に気付いていないわけじゃない。

少し離れたところを歩く、君の背中に呟く。

いつか、また、このてのひらに。

きょうだいでも、

幼なじみでもなく、

君を感じることが出来ますように。

気付くと

「はいっ、今日はしょうが焼き弁当だよ」

クルクル巻いた長い髪をリボンで二つに結んだ超美少女が、俺の前に三段になった重箱をどかんと置く。

ニコニコ笑顔の彼女に昼飯の世話をやかれている俺に、周りの奴らの羨望の眼差しが突き刺さる。

日常的になってしまったそれらをやり過ごしながら、俺はイタダキマスと合掌して、一段目白い飯、二段目しょうが焼きと野菜のピクルス、三段目に何故かみっちり詰められたイチゴを消化していた。

女の子が作る割には大味な詰め方の弁当はそれでもやはり美味しい。

野郎共の殺人的ウラヤマ光線を浴びながらも彼女を拒みきれない原因が、この弁当の美味さにあるだろう。

「美味しい？」

恥じらいながら尋ねてくる彼女に無言で頷く。

えへ、よかったあ、と頬を染めながら安堵の溜め息をつく彼女は俺の目から見ても可愛くて、

ハイと差し出されるお茶のタイミングも言うことがない。

ただひとつ難を言うなら。

「……そろそろ素性くらい教えてくれてもいいんじゃないの」

俺の呟きに大きな瞳を丸く瞬かせ、重箱を包んでいた彼女が、チチ、と人差し指を目の前で振る。

「だめだよ、わたしは一介の……だもんっ。対象に正体を知られちゃダメなの！」

ピョンとフレアスカートの裾を翻し、彼女は可愛く小首を傾げる。

「明日のお弁当はスコッチエッグとシーザーサラダねっ

え？ どうして食べたいものかわかるんだって？

やだなあ、当然だよ！

君のことならなぐんでも！ お見通しなんだから」

だってわたしは、

とキラキラした瞳で彼女。

「貴方のストーカーなんだもんっ」

……気づけば、俺の生活を侵食していた美少女は、いつものようにエプロンドレスを翻し、男子校の廊下を異世界並みに不可解な空間にしながら帰っていった。

辛い、辛いけど今は泣かせて

こっちに駆け寄ってくる、あの子の笑顔で全部わかった。

上手くいったんだ。

「うわあんっ、うれしいよう〜！」

勢いのままあたしに抱き付いて、半泣き顔の友人をヨシヨシと宥める。

「ありがとう、ホント、協力してくれてありがとう〜！」

「ちょっと落ち着きなよ。で、ヤツ、何て言っておツケーしたの？」

あたしがクスクス笑いながら尋ねると、少し落ち着いたのかポツと頬を赤らめて、もじもじする。

可愛いわね、まったく。

「……あのね、俺もずっと気になってたっ…て。話、聞いたりしてたから、前から親しい様な気持ちだったし、付き合っの、オツケーだっ」

「そっか」

「やっぱりいろいろ、協力してくれてたんだね！ 話って、朱花ちゃんかしてくれてたんでしょ？ 大切な幼なじみの親友だから、大事にするよって言ってくれたの…！」

見たこともないくらい、綺麗で可愛らしい笑顔にチクリと痛む、胸の奥。

あたしたちが話終わるのを待っていたのか、ヤツがゆっくりとこちらへやって来る。

僅かに笑んで。

腐れ縁の幼なじみ、
親友の好きな相手、

あなたを幸せにすることが出来るのは、

あたしじゃない他のひと。

あたしがあなたのために出来ること、

何でもするから、

幸せになって。

心の奥、シクシク泣いているあたしがいるけれど、

辛くはないよ。

あなたが笑っているから、

辛くはない、

辛くはないけど、

心の中だけ、

今は泣かせて
。

二番目

いつも君の一番は他にいて、俺は二番目。

幼稚園のときは、隣の組のあつくん。

小学一年のときは、隣の席のかずみくん。

二年のときは、桜くん。

三年で、タカちゃん。

四年は、渚くん。

五・六年、アイドルグループのハヤト。

中学時代は、担任の松川先生。

高校一年、八尾先輩。

俺はいつも、くんの次に大好きよ！で。

万年二位、不動のN.O.2。

だけどいつからだったろう。

毎年変わる、君の一番好きな人より。

毎年変わらない、君が二番目に好きな俺。

そのほうが、ずっとスゴいって気付いたのは？

いいよ、そのうち君も気付くだろう。

すぐに変わる、一番好きなひと。

ずっと変わらない、二番目に好きな俺。

君が二番目だという俺が、

いちばんの、『二番』なんだってことにね。
。

勿忘草の花言葉

小さく青い花を付ける、目立たないその花の名前を覚えてくれたのは、小学生の時、一緒に園芸委員をしていた子だった。

園芸委員とは名ばかり、活発だった自分はグラウンドで遊ぶ方が優先で、花壇の水やりなんかも全部相手に任せきりにしていた。

でも、その子は文句なんて言ったこともなく、いつもニコニコして花の世話をしていた。

「花の世話なんて楽しい？ お前、他のクラスの面倒も見てるだろ」

たまたまその日、水やりをしようとしてるのを見かけて、サボっているのを自覚してただけ見て見ぬふりをするのも心苦しく、重そうにジョウロを持つのに手を貸した。

有難う、とほのかに微笑んだ顔に別に、自分の仕事でもあるから、とそっぽを向いたのは少しの照れがあったから。

大人しくて、自己主張をせず、他人の話をいつも穏やかに聞いていたその子は、まるで自分とは違う生き物のようでもう接したらいいか分からなかったのだ。

「花が好きだから」

だから、世話をして綺麗に咲いてくれるのが嬉しいのだ、とはにかみながら話すのに、

自分なんか、面倒だなとしか思わないのにな、と少し感心して雑草まできちんと抜いているその手元を見ていた。

「そっちは抜かないの？」

「ああ、これ、雑草じゃないよ。勿忘草。もうちよっとしたら、花が咲くから」

「……ワスレナグサ？」

変な名前、と首を傾げたのに少し笑い、こんな伝説があって、そう呼ばれるようになっただって、とその話を教えてくれる。

情緒のない自分が、「なんかマヌケじゃん、そいつ」とコメントするのにくすす笑いながら。

小さな妹に本を読んであげているというその子は、花にまつわる話をよく知っていて、全くそっちの知識のない自分に色々教えてくれた。

知らない話を聞くのは楽しく、ちゃんと仕事を手伝うようになって一ヶ月くらいたった頃。

その子は突然いなくなった。

家の都合だとかで遠くに行くことになり、挨拶もなく転校してしま
ったのだ。

…昨日、水やりの時もいつも通りで、何も言わなかった。

……何も聞いてない。

穏やかに笑うその顔が頭に浮かんで、ばかりと空席になった机を見
て、喪失感が胸を塞いだ。

…何だよ、何か言ってけよ、

これから自分一人で委員の仕事やらなくちゃいけないのに。

八つ当たりめいた文句を心の中で言っていないと泣いてしまいそう
だった。

理由がわからない寂しさがあふれて。

「……………」

カサリ、と机の中突っ込んだ手に教科書じゃない物が触れて、それ
を引き出す。

リボンで束ねた小さな花が、そこにあった。

その小さな青い花弁に、聞いた話を思い出す。

私をわすれないで、と願いを込めた、伝説を。

自分にだけ、向けられたメッセージに、胸がぎゅうっとなった。

初恋だったのかなとようやくその時に気付いた。

「ご予算は一万で、ですね。少しお時間いただきますが」

昼を過ぎて入ってきた会社員風の青年の注文にメモを取りながら確認する。

「構いませんよ。妹のお祝いなので、華やかに、可愛らしい感じでお願ひします」

店内の花を見回しつつ、どこか懐かしげにする彼が、作りかけのプランターに目を留めて穏やかに微笑んだ。

「……勿忘草を扱うのは、めずらしくないですか？」

「ええ、雑草と間違う人もいますね。わたしは好きなんですけど」

使う花の大体のラインを決めて、彼に確認をとる。

お任せします、と穏やかに微笑んだ、その瞳が私を見つめた。

「出来るのは？」

「30分か、一時間か見ていただけますか？ 他の者が戻るまで、手が足りないものですから」

注文票に名前を貰って、承り票を渡す。

「では、お待ちしております」

「よろしく願います。……君の休憩時間も、そのくらいかな？」

ええ、と頷くわたしに、じゃあ、また後で、と眼差しが懐かしげに細められる。

一時間後。

最初に何を話そうか。

久しぶり？

それとも。

君を、忘れたことなんて、なかったよ。

君がいない世界

あの日、あたしの世界は壊れた。

突然の出来事に。

奪われた、ただ一人の家族と自由。

それがどうしようもない事故であったなら、諦めもついたので、それは故意の出来事で。

病院のベッドで目を覚ましたあたしは世界の崩壊を告げられる。

悪意をもって吹き込まれた毒をあたしは飲んで、彼を罵り憎んだ。

……彼が本当に悪いわけじゃないことなんて分かってる。

分かってるけれど、他にどうしようもなかった。

たった一人残され、誰かの手を借りてやっと日常生活が送れる。

そんな身体になったあたしが八つ当たり出来るのは、こんな境遇になる原因となった彼しかいなかったのよ。

全ての保証を申し出た彼を、下僕のように扱いながら、
どんなに我儘を言っても、理不尽な言葉を投げつけても、微笑む彼
しか。

「彼を解放してちょうだい？ 貴女には不自由がないよう、私が責
任持って、手配するから」

ある日、悲壮な顔で、彼の恋人だとかいう女があたしの前に現れた。
車椅子のあたしは書齋で本を読んでいた。一人きりだった。
彼女は屋敷の使用人に金を掴ませて、入り込んだらしい。

お願いよ、と土下座までしそうなその大人の綺麗な女に、苛立ちが
つくる。

「…いいですよ。」

……なんてあたしが言うと思ったんですか？

お兄ちゃんを殺しておいて、

あたしをこんなにしておいて、

あいつが幸せになるなんてこと許さない。

一生、幸せになんてさせてやらない………！」

このいつまでたつても薄れない、憎しみは何処から来るんだろう。
こんなあたしをお兄ちゃんはけして喜ばない。

自分から不幸になって、誰かを不幸にするあたしを、悲しく思うはず。

だけど、彼があたしと話すため膝をつくたび、どんなに罵倒しても微笑むたび、あたしの胸の奥、溜まっていくものがあった。

どんどんあたしをイヤな子にする

……

「……どうして、」

冥い目をした女が、持っていたバッグから光るものを取り出した。

どうしてあの時死んでしまわなかったの、と虚ろに呟いて、あたしにそれを向けた。

そうね、あたしもそう思う。

だったら、こんな気持ちも知らず、

お兄ちゃんに、ごめんなさいと言い続けながら、

生きていかなくても済んだのに。

……でも、

もう楽にしてくれるんでしょう？

さあ早く。

彼をあたしから解放して。

あたしを彼から解放して

……、

「っ……お怪我は、ありませんか」

温かいものに包まれて、あたしは思っていた衝撃が訪れなかったことに一瞬茫然とした。

彼に抱きしめられている。

女は警備員に取り押さえられ、どうして、と叫び続けていて。

あたしに降り下ろされる筈だったナイフは、転がって床の上に

「……………！」

「？ ああ、大丈夫です。かすただけですから すみません、私のせいでまた貴女に傷を付けたところだった……………」

青ざめたあたしの頬をそつと撫でる、右手。

左腕から血を流しているのは自分なのに。

「…っかじゃないの…！」

ドン、と拳で彼の胸を叩く。

あたしから解放されるチャンスだったのに。

どうして庇ったりするの。

どうして、恋人だった人よりあたしの方を、愛しそうな瞳で見るの。

やめて、

これ以上貴方のこと

「こんな傷大丈夫ですよ。慣れていきますから」

……本当に、何でもないことのように笑って言うのに、あたしの何が切れた。

くだらない争いで命を狙われているひと。

何度も危ない目に遭っているひと。

未だ、危険に曝されているひと。

巻き込まれたお兄ちゃんみたいに、いつ死んでもおかしくないひと
……、

「……っ!」

衝動のまま、手近にあったクッションを投げつける。
近くにあるものは、全部、彼に向かって投げてやった。

戸惑いながら、止めようとせず、不思議そうにあたしの癩癩を受け止めて。

初めて会った、あの日みたいに。

投げるものがなくなって、爆発しそうな胸の苦しさを誤魔化せなくなって、ボロボロ泣き出したあたしに、そっと近寄ってくる。

恐る恐る、伸ばされた手にかじりついてその胸に顔を押し付けた。

お兄ちゃん、ごめんなさい。

あたし、あたしはいつの間にかこのひとを

もう、ダメなの。

考えられないの。

貴方のいない世界。

貴方を無くせば、今度こそあたし、なにもかも無くなってしまふ。

「馬鹿っ…、アンタが怪我なんかしたら、あたしの髪、誰が洗うのよ……！」

「ああ…そうですね、すみません」

いつも通り悪態をつくあたしにクスリと苦笑する気配。

一生憎んで、

一生許さない、

一生責め続けるから、

お願い、罪滅ぼしでもいい、

……傍にいて。

それがどんなに間違っていることだとしても。

あなたのいない世界に、

あたしをひとり、置き去りにしないで

.....

偽りの接吻

私のこと、好き？

そう訊くと必ず優しく微笑んで、好きだよと答えてくれる。

やさしいキスも、抱擁も、私を愛してくれていると、

本気で、勘違いしそうになる。

でもね、知っているの。

あなたが本当に愛しているのは、あのひと。

私とよく似た、艶やかな黒髪、華奢な体躯、涼やかな声、薔薇色の唇の、

私を抱きながら、想っているのは他のひとの妻になった、

私のお姉様。

身代わりでもいい、

重ねて見つめられるのも構わない。

貴方が私のものになるのなら。

気づかないふりで、

ずっといるわ。

貴方からの偽りのキス、

甘くて苦い、

痛みと共に、

これからも

。

終わったあとのもどかしさ

「あ……っ」

はあ、と息をついて、身体を離す。
力が入らないらしい彼女の身体を支えるのを忘れずに。

情交の名残を残すボウツとした彼女の頼りない瞳に、ちゃんと抱きしめてやりたくなるが、そうしたらまた止まらなくなるのが分かっていた。

人気のない校舎の片隅で、立ったまま繋がって、慌ただしく熱を分け合っていた俺たちは、乱れた衣服を整えたら恋人同士ではなく教師と生徒。

他人に見咎められれば二人ともただではすまない。

そうわかっていて、
手を出したのは俺の方だ。

彼女のことを思うなら、こんな危ういことをするのは間違っている、
それでも、抑えられなかった。

それが罪と呼ばれるものであることは重々承知で畏にかけ、流され

るように仕向けた。

無垢な彼女の身体に、快樂を教えて離れられなくさせた。

校内でしか触れない、と決めたのは、外で会つと只でさえ我慢のきかない俺の本能が後先考えず彼女を我が物にしそうだったからだ。

誰の目も触れぬよう、閉じ込めて、俺だけのモノに。

俺がこんなにお前に恋着しているなんて、気付いても思ってもいな
いんだろう？

ちゃんと抱いてやれないことが、

安心させる言葉も伝えられないことが、

いつも俺の胸の奥でわだかまっている。

だがそれもあと少し。

彼女が生徒ではなくなる日。

その日がくれば、

こんなもどかしさとはサヨナラ出来るから。

もう少し、待っていてくれないか。

俺の愛しい君　。

アトガキ

もともとはお友達から回ってきた小説バトン10題。

誰が作られたのか明記されてなかったので、心当たりのある方、無断借用だわ！と思われたら大変申し訳ございません。

ではそれぞれの言い訳とかしてみようと思います。

*1・さよならまで

先生×生徒。なるべく説明を削ぎ落として心情だけでわかるようにしたつもり……なんですすがいかがでしょう。10と対になっています。

*2・僕が愛して君が憎んだ

病ンデレその1。

車椅子の美少女おそらくローティーンと金持ち青年。萌え。しかし説明ばかりになってしまった感があり、反省。8と対になります。

*3・きつと、また、この掌に

短かつ！

幼なじみか姉弟か、皆様の好みでお読み下さい。

*4・気付くと

病ンデレその2。最初は、いつの間にか自分以外の人々が知らない娘を自分の彼女だと認識している…みたいなSFだったんですが長くなりすぎ変更。

*5・辛い、辛い、辛いけど今は泣かせて

語り手の好きな相手は彼女・彼どちらでもよいように書いたつもりです。

実はこれ、裏バージョンがありました。語り手は友達が好きで友達は彼が好きで彼は語り手が好きで、語り手が言うから告白してきた友達と付き合っ、その見返りに友達の知らないところで語り手を抱く、なんていう一方通行三角関係なドロドロ話なんですよ。深月、ときどきブラックな人格がこっという話を書きたがります…。

*6・2番目

短かつ、パート2。これも他に話を書いていたのですが、長くなりすぎ&こじつけっぽくなったので変更。

*7・勿忘草の花言葉（…私を忘れないで）

一番気に入ってるネタ。

ミスリードを狙ってああいう書き方にしましたが、皆様騙されてくれえました？ じゃなければ私の未熟…。

花屋の店員さんとその彼氏、という後日ネタも書きたいな。

（現在自サイトメルマガで連載中。ばかっふる鷲進中）

*8・君がいない世界

2の少女側からの話。どっちもどっち。書いたときブログの文字数ギリギリで、かなり削ってしまったのでわかりにくい。反省…。ちゃんと書いてみたいな、この二人。

*9・偽りの接吻

これもある意味病ンデレ。

物凄い、ネタに困ったお題。結局ありがちに。

*10・終わったあとのもどかしさ

1の先生サイド。意思の疎通出来てね〜カップル。そしてお題にこじつけ内容…。

スッキリしない二人の、結末はこのあとに。

てなわけで、ほぼ病ンデレと幼なじみネタになった訳ですが、いかがでしたでしょうか。

宜しければ、このネタ好き、とか、わかんね〜んだよ、等々ご意見下さい…。

L o v e r s

卒業式のあと。

彼と秘密の会瀬を繰り返していた教室で、別れの言葉を探しあぐねていたところ、騒がしくも微笑ましい後輩たちがやって来た。

お祝いの用意をしたからと彼らに腕を引っ張られ、教室を出る間に振り返る。

…じゃあ、失礼します。

ああ。

あっけない別れ。

さっぱりした終わり。

後輩たちが個人的な送別会をしてくれる間もずっと、彼のことが頭を離れなかった。

最初から、先を考えない恋。

始まりは、強引に奪っていった彼に流されただけだったのに。

皆の生徒会長様が、男の下でこんな顔するって知ってるの、俺だけか？

私を資料室のソファに組敷いて、囁いた、意地悪な笑み。

嫌だと言いながら、女として扱われることにゾクゾクした。

私は、真面目でしっかりした優等生というイメージから離れたくて、彼は一時のスリルを味わいたかっただけ。

教師と女生徒の秘密の関係を、楽しんでいただけだから。

卒業したら終わり。

今日で終わりなの。

大きな花束を持って、みんなに見送られて、もう私の居場所ではなくなつた生徒会室を出る。

式が終わった校舎はシンとしていて、大半の生徒たちはすでに帰ったあと。

もう、この校舎を出れば、私はこの生徒じゃなくなる。

苦しくて幸せで辛くて楽しかった高校生活も終わり

.....

本当に？

終わりなの？

終わることが出来るの？

言わなくちゃいけないことが、残ってるんじゃないの？

強引に奪われた。

流された。

秘密の関係を楽しんで

なんて、誤魔化したって、間違えようもないことがある。

貴方が好きなの。

まだちゃんと、貴方が好きだと言ってない、

「……おい。おいおいコラ、どこに行く」

門を出る手前でクルリと踵を返し、校内へ戻ろうとした私を呼び止める声。

彼の、声。

振り返ると門の外、コートポケットに手を突っ込んで、困った瞳で私を見てる、先生の姿。

「ようやくここまで来たつつのに、またお前はどこに行くんだ」

……貴方のところよ。

ちよいちよいと手招きで、彼が私を呼ぶ。

わけがわからなくて、ふらふらと呼ばれるまま傍に行く　校門の、

外に。

門を一步踏み出した途端、
フワリと暖かいものに包まれて、私は硬直した。

……学校の外で、私に触れるなんてことなかったのに。

だから、学内だけの関係だって、そう思ってたのに。

「……………やっとだな」

耳の側でささやかれる声に今さらときめいて、でもそこが校門の前
だということにあらためて気付いて慌てた。

離れようとして、きつく抱きしめ直される。

せんせい、と言いかけた唇を塞がれて

「もう先生じゃない」

お前も生徒じゃないだろう、と卒業証書をつついて、微笑む彼。

ドクドク鼓動がうるさくて、

足元がフワフワして、

その、予感に、目眩がした。

愛してる

待ち望んでいたその言葉を囁かれて、足が崩れる。

「っ…ふえ…っ、せんせ…せんせいっ……」

支えるように抱きしめられる腕にしがみつき、泣きじゃくりながら胸に顔を埋める。

「先生じゃなくて、」

促されるまま、名前を呼ぶ。

ずっと呼びたかった貴方の名前を。

好きです、限られた関係なんてイヤ、傍にいたい、いて欲しいの、好きなの、

堰を切ったように、今まで我慢していた言葉が溢れる。

それにいちいち返事をしながら、彼の抱きしめる力が強くなるから。

痛くて苦しくて、これが夢じゃないって分かったの。

涙でグシャグシャになった顔を両手で包まれて。

触れ合うだけのくちづけ。

まっすぐに、私を見つめる瞳。

貴方からの、ずっと一緒にいるため約束の言葉に、必死に頷きを返

して。

私たちの今までに別れを告げる。

新しいこれからが始まる。

了。

最後の夏の日

ひぐらしが夏の終わりを告げる。

「課題、終わったか？」

「あと日記を残すのみだよ」

「しかし今どき夏休みの日記もないよな、俺ら高校生だぞ？」

「内容ダブリそうだよね、私たち。毎日一緒だったもん」

話しながら、窓から夕暮れ空を眺める。日に日に赤さを増す太陽が落ちるときを。

まだ。

行かないで。

「……ごめんな」

夏休み、まだ終わらないで。

「海も、山も、花火も、ちゃんと連れて行ってやりたかった」

行かないで。

「夢の中じゃなく、現実で」

首を振る。

触れられない彼を、せめて見つめていたいのに、溢れる水がそれを邪魔する。

付き合い始めて、初めての夏だったのに。

お願い、まだ。

鼓膜が破れるかと思うほどのブレーキ音。

タイヤの焦げるような匂い。

背中を強く押されて、生け垣に倒れ込んだと気付いたのは、誰かの悲鳴を聞いたあとだった。

アスファルトに広がる、赤い水。

さっきまで隣で笑っていた君が、いなかった。

脳裏から離れない、あの光景を。

振り払うように、首を振る。

彼が腕を伸ばし、壁にかけたカレンダーにバツをつける。

八月最後の日。

彼と夢でしか会えなくなつて、四十九日目に。

「明日から、新学期だよ。夏は、終わり」

微笑む彼がぼやける。

お願い、まだ、
好きなの。

「……好きだよ。最後の夏を、ありがとう」

行かないで。

涙に塞がれた私の瞼に、ひんやりした唇が触れて、離れた。

さようなら。

目を開けると一筋、差し込んだ夕陽が消えるところだった。
ベッドに横たわる私のほか、誰もいない部屋が、一瞬の暗闇に包
まれて。

ひぐらしの声が途切れた。

夏が、終わる。

f i n .

最後の夏の日（後書き）

初出：2009/09/11
ブロッグ
S
S

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264/>

月光病

2010年11月19日18時35分発行